

フレーベル 著

『リナは如何にして読み書きを學ぶか』(一)

—— 楽しく忙しく動く子供達のための美しい物語 ——

莊 司 雅 子 譯

ま え が き

フレーベルの教育思想の理解の困難なことは既に人々のよく知るところである。ひとり日本に限らず、彼の本國獨逸においてさえそうだつた。彼れの主著「人間教育」の原稿を手にした有名な教育學者ハルニツシュが、その難解な表現はとも讀むに耐えるものではないとして、鋭くちやにもみ破つたということは有名な話である。ハルニツシュのような大教育學者にして尙斯くの如くであつたのだから、決してや一般の人々に取つてフレーベルを理解することの容易でないことは想像するに難くない。そこで獨逸においても當時各方面から、彼の深遠な思想を平易な形式で叙述して欲しいという要望が起つて來た。この要望に答えてフレーベル自ら執筆したのが私のここに譯し出して見た「リナは如何にして読み書きを學ぶか」の一篇である。これは彼がその思想も圓熟した晩年に發刊した幼児教育の専門雜誌である「週刊誌」に連載したものである。人々はこれに依つてフレーベルの教育思想は普通考えられているように、決して雲煙の彼方を彷彿う把握不能の抽象的なものではなくて、實にその日その日の幼児の實際生活を中心とした、いとも具體的な生き生きとしたものであるということを知るであらう。而も同時に人はあの一見難解な教育原理を、幼児の活動や體驗のうちに應用する具體的方法を手取るように理解することが出来るであらう。

尙お「リナは如何にして読み書きを學ぶか」の一篇の中に、人々は子供に取つてあくまでも自然で眞實な生活が、子供

の教育のアルファでもあればまたオメガでもあるという生活教育の原理を學び知ることが出来るであらう。「生活が陶冶する」と嘗てベスタロッチーが道破した生活教育の原理は、實はいとも歴史的な古典的なもので、新教育の豫言者ルソームもベスタロッチーもフレーベルもそのためにこそ終生戦つた。今日新教育の名もて宣傳されている生活教育はいうまでもなく、コア・カリキュラムも、コンミニュニティスクールも、ガイダンスもその由つて來るところはこうした豫言者達の教えの應用にも過ぎない。現にフレーベルが「リナは如何にして讀み書きを學ぶか」の中に述べている次の引用を讀む讀者は恐らくこの間の消息に就いて思い半ばに過ぎるであらう、「生活が子供達に教育的に與えたものは、更に生活のうちに移り行き、そして再び完全な新鮮な健康な生活のうち、またさういう生活のために花咲き實を結ぶものである」

一千九百四十九年八月六日 原爆四週年を迎えて

廣島文理科大學教育學研究室

莊 司 雅 子

リナは喜んで仕事をしたがる六歳になる女の子であつた。彼女は簡単な玩具を使つて色んな遊びが出来た。例えば骰子や丸太棒のようなものから澤山のきれいなものを組立てたり、色や形の違つた板片や棒片を使つて澤山の美しいものを並べたりする。

その他色んな仕方では細長い色紙や棒片などをきれいに組合せたり、美しいものを作り出したりすることが出来た。ほんとうにリナは一寸した玩具から自分の好きなものは何でも澤山に作り出すことが出来た。

リナはまた上手にボールをキャッチすることも出来た。そしてこのことに依つて物事の處理が機敏になり、物の扱ひ方が會得され、だからリナはすぐに物を落したり、また或る處から無器用に物を押し返けたりするようなことがないよう

に、自分の手足を上手に動かすことが出来た。

そればかりでなくて、リナは色々の美しい可愛い歌を知つており、それを歌うことが出来た。そしてそれを澤山の遊戯につけて歌いながら遊ぶのである。それがまたますます遊戯を楽しくする。というのはその可愛い、歌は同時にリナのしたことと就いて色々と教えてくれるから。だからリナはお父さんやお母さんに絶えず「それは何ですか」とか「何故ですか」とか言つて、一々尋ねないでもすむのである。

このようにリナは何時も朗らかで活潑であつた。少しも退屈を感じたり不機嫌であつたりすることがなかつたから。それどころか何時も満足して不平をこぼすことなく、朗らかで快活であつたから、リナは両親の特別の喜びであつた。また自分から進んで両親の喜びとなり、愉快に規則正しい順序立

つた仕事をしたり、楽しく遊んだりしたい子供達にとつてはお手本でもあつた。

こんな良い性質を有つていたから、リナは大抵両親と一緒に居り、その傍で靜かに遊ぶことを許されていた。或る日のこと、リナは父親が嬉しそうに一通の手紙を受け取つて、間もなく同じように嬉しそうな返事を出したのを見た。リナは部屋に居る母の處へ行つてねだつた。

「ねえお母さん！ 小さい紙を頂戴ねえ、ねえ！お母さん！リナもお父さんのようにお手紙を書くんだから」

「まあリナのような小さな子が、リナちゃん！」と母が言つた、「リナはお父さんのようにはまだ書けませんよ。それに紙に書くなんてなおさらよ！リナのこの小さなお指はまだまだ弱くつて、上手にペンや鉛筆を持つたり動かしたり出来ませんよ。でもね、お母さんは小さな棒片でリナがどんなにして字や言葉を書けるか、まあとにかくリナが書きたいと思ふことが書けるように教えて上げましょうね」優しい母は小さいリナにさう言つた。けれどリナは續けてねだつた。「でもねえお母さん、他の人はこんなに私が並べたもの讀めるかしら？」

「さあ、早速やつて見ましょう。お母さんはリナと同じような棒片を持っていますよ。それにこの滑らかな黒い机は何とあつらえ向でしょう。この上に眞白な細い木の棒片を並べると、きつと美しく見えますよ。ところでリナ知つてるでしょう？」と親切な母は續けた、「お父さんがお手紙をお出しに

なる時は、何時もお父さんのお名前をお手紙の裏にお書きに
なるでしょう。そして表にはお手紙を上げる方のお名前をお
書きになりますね。だからね、リナも先づ第一に自分の名前
を書かなくつちやなりませんね。それには先づ棒片で並べる
ことから勉強しましょう」

「ええ、ええ、お母さん、して見たいわ、させて頂戴」

「でわね、リナちゃん、あなたのお名前は何とおつしやいますか？」

「まあ！お母さん知つていて。はい私はリナと申します」
「ほんとにお母さんはあなたの名前をよく知つていますよ」と母は言つた、「だけれどね、私達が若し名前を書く時には、

今はただ棒片で並べるだけですけれど——先づ初め、それを正しく正確に聽いて、そしてその名前の中で氣のついた音や響きの違ひによく注意しなければなりません。それから此等の音や響きの符號や文字を覺えることを學ばなければなりません。だからリナの名前の綴りの中にある音や響きを、聽いたとおりに正しく文字に並べなければなりません」

こんな風に思慮深く教訓に富む優しい母は注意深い子供に話して聞かせた。そして更に續けた。「さあ、リナちゃん！リナのお名前をもう一度正しく、ゆつくり、そしてはつきり言つてごらん！そしてリナがその中に見つけた違つた音をよく注意してごらん。お母さんも聞いたものを言うから」
學びたい心で一杯になつていたりリナはゆつくりそしてはつきり彼女の名前「L—i—n—n—a」と言つた。

「さあお母さんはiとaの音が聞えましたよ」と母は言つた
「もう一度一緒にリナのお名前を言つて見ましょう」母は續けた。「そしてお母さんが聞いたのと同じ音がリナにも聞えるかどうか氣をつけてごらん」

母と子は今度は一緒にLiina・Liina・Liinaと言つた。

「あら、お母さん、お母さんと同じように聞えるわ。Liinaの中にはiとaの音があるわ」

「そう。私達はLiinaの中にiとaの開いた音を聞きましたね」

「さありナ！ お母さんはこの棒片を垂直にリナの前に置きますよ——母は續けた。「リナが今それをこの形のまま見てください」と言つてごらん」母はもう一度棒片をリナの前に垂直に——置いた。そしてリナは同時にiと發音した。

「ごらん！」と優しい母は續けて子供に言つた。
「この棒片がこんなに置かれた時には何時でもiという音の符號ですよ」

母はもう一度棒片を娘の前に置き、同時に發音を數回繰り返えさせた。

「けれども、リナのお名前の中にはもう一つの開いた音が聞えませんでしたかね」と母は尋ねつゝ續けた。

「はいaという音」と子供は答えた。

「ごらん！」と母は言つた。「今お母さんは二本の棒片を上の方でお互に觸れ合うように置き、そしてもう一本の小さい

ので水平の方向にこの二本を結びつけますよ。では、この符號を見たらすぐリナのお名前の中のもう一つの音を聞かせて頂戴」

母は符號を取り去り、再び置き、子供は自分の前に符號が置かれる度毎にaと發音する。

このようにして母と子供との間には間もなく何か楽しそうな生き生きとした朗らかな生活がもたれるようになった。それというのも母が垂直に棒片を置けば、子供は直ちにそれが示す符號のiをはつきり言つたり、次には聯絡した三本の棒片をAの形に置おけば、子供は直ちにはつきりaの音を發音したりするからである。今度は交代した。子供が棒片を置き、母はそれらの音を言つた。時には母が先にそれらの音を言つと、子供はその各々の音に正しい符號即ち文字を並べなければならぬ。

さて二つの符號即ち文字IとAとが母と子供との前に置かれた。母は子供に尋ねた「ところでリナのお名前はただiとaとだけですか」

「いいえ私の名前はLiinaと呼びます」
「そうでしたね。するとリナのお名前にはまだ符號が足りませんね。では早速そのお名前をもう一度ゆっくり正しくお母さんに言つて頂戴。そしてリナのお口、特に舌の動きに注意してごらん、それから何かに氣がつかないかどうか、よく耳をすましてごらん」こう母が言つたので、母が言つた通りに「Liina」と言つた。

「今度はお母さんも同じように、L-i-i-n-aと言つて見るから、リナはよく氣をつけてごらん」と母は言つた。

「ああ、ああ」子供は直ぐに氣が附いた。「舌の動きでiとaとの外にまだ音があつてよ」

「そう、そう。ではもう一度よく注意して見ましよう。お母さんはiの前にリナが聞えたその音の符號を置きますよ。

“Li”とこれは“Li”と呼ぶんですよ。次にはaの前にリナが聞えた音の符號を置きますよ。“Li-a”そしてこれは“Li-a”と呼びましよう。

そして兩方を一緒に並べて“Li-a, a-a, Li-a”と呼びましよう。このようにして母は勉強好きで注意深い子供を教えた。聰明な子供は“Li-a, Li-a”と讀んで見たり、言つて見たりした。更には符號を除いて見たり新しく置いて見たりした。

「ああ嬉しい、お母さん、もう私は自分の名前を並べて讀むことが出来ましたわ。お母さんありがとう。でもお父さんや他の人々もそれが讀めるかしら？」

「丁度お晝ですね」と母は言つた。「お父さんや叔父さんはもうすぐお歸りになるでしよう。そしたらこのこのようにリナの並べたものが、お父さんや叔父さんにも讀めるかどうか見ましようね」

「ああ、今でも此處にお父さんや叔父さんがいらつしやればどんなに嬉しいでしよう」

子供が丁度こゝ言つた時、彼等が部屋にはいつて來た。母

が父や叔父に挨拶をすますや否なや、リナはしきりに母にねだるのであつた。はやくも母の着物を引張り、そして歎願するように高く見上げた。母にはその渴望的な眼差しまなざしの何であるかがすぐわかつた。そして父の手をとつて机の方へ連れて行き、同時に「お父さん、此處にリナは何と並べてありますか」と言つた。

父を見てそして“Li-a”と讀んだ。「おやリナ！ リナはもう自分の名前が並べられるのかね。もうこんなに早く棒片で自分の名前が並べられるようになったのかね」

そこへ叔父もはいつて來てそして言つた。「どれどれ、僕にも見せてごらん。なるほどね。Li-aと棒片で並べてあるね」

一同は大へんな喜びであつた。

併し父は言つた。「ではリナ、お前の名前を並べるところを見せてごらん。お父さんは棒片をすらしてしまふから、もう一度並べてごらん」

「はいすぐやつて見ましよう」と言いながらリナは“Li-a, a”と並べた。

それから父と叔父とが交る交るに、この文字を聞いて見たり、あの符號を尋ねて見たりした。その度毎に子供は開いた音や閉じた音を指さしてはそれを言つた。今度は逆に彼等はリナの名前の音の一つ一つを聲高く言い、そして子供はそれに對して文字を並べた。

この喜びと嬉しさとを眞に味はいたい人は直接見なければ

解らないであらう。

併し母は言った。「あなた方子供達よ、お晝飯のことなど忘れておしまいですね。御馳走がすっかり冷めてしましましたよ」

一同は食卓についた、叔父が言った。「お母さんはなかなか氣をつかうことが多いですね。リナちゃん世話をしたり、皆のためにお料理が冷えやしないかと心配なさつたりして。今日はリナちゃん自分の名前の並べ方を讀み方で皆を喜ばしてくれましたね。明日はひとつ *mutter* (おかあさま) という美しい言葉の讀み書きを覚えて喜ばせて下さいね」

「はい叔父さん、きつとそうしましょう」と子供は言った。このようにして皆にとつて、今日はまるで誕生祝いかのよう

に、食卓が非常に楽しく喜ばしいものであつた。その翌日のこと、注意深い母が日頃から子供と共に遊ぶために取つてある時間が来るや、子供は母のところへ飛んで来てそして頼むように言った。

「ねえ！ 今日 *mutter* (おかあさま) という美しい言葉を教へて頂戴。そうすればお父さんや叔父さんがお歸りになつたらまた喜ばして上げられますから」

「ほんとにそれはリナが喜んで並べて見たい美しい言葉です。ではその並べ方を勉強しましょうね」と母は言った。

「だけど、もう一つ同じような美しい愛する言葉があります。それは何か、リナ知りませんか？」

「ああ知つてます。 *Vater* (おとうやあ)」

「そう。では今日はその並べ方を習ひましょうね。そうすればお父さんがお歸りになると、リナとお母さんとお父さんのことを考へ、愛してることがよくお解かりになるでしょうから」そこで先づ母は再び子供に *V | a | t | e | r* という言葉を明瞭に正しく言はせ、同時にどんな音が聞えるか尋ねた。子供は容易く *a | e* と返事したばかりでなく、直ちに「ごらんお母さま、*a* の符號知つてよ」と言つて、それをすぐ母の前で机の上に *A* と並べて見た。

「上手ね、では今度はお母さんが *e* の符號も教へて上げましょう」そしてそれを *A* から少し離れたところに並べた。

A E

リナの熱心と母の助けとで間もなく、その言葉の中にまだある *v* と *t* と *r* との閉ぢた音と、それに對する三つの符號

V T R

が見出され、そして僅かの練習と位置の交換とに依つてしつかり覚え、そしてやがて

V A T E R

という美しい言葉が彼等の前に並べられた。そして自分の名前の時と同じように容易に讀むことが出来た。たといすらされてしまつても、間もなくこの新しい言葉を自分で再び並べることが出来るほどになつた。

さてリナは今のこの喜びと、父や叔父が若しや今でも歸ればと待ち望んでいる喜びとで、またも歡喜に充ち満ちていた。これに依つて幸福な勉強好きな少女は益々進もうと努め

る。それで彼女は「お母さん、ねえ、お母さん！でも叔父さんは Mutter (おかあさま) という美しい言葉を並べるようにつておつしやつてたよ」と言つてねだつた。「ねえ教えて頂戴。そしたら今日叔父さんが見えたら、叔父さんを喜ばして上げることが出来るわ。また若し私がそれを並べられたらお父さんもきつとお喜びになるでしょう」

「いいですとも」と母は快く返事した。「ただ新しいものを習つて前のものを忘れないようにしなくてはね」
「決して忘れませんよ。決して。何だつたらお母さん何時でも聞いて見て頂戴。」

そこで母は先づ娘にその言葉を今一度ゆつくり正確に發音させ、そして U と e との音に氣を附けさせた。やがて子供はただ一つの新しい音 (U) があるということに氣が附く。そして同時に母は子供にその符號を教へた。

U と。そして二つの文字を少し離して並べ、リナにその通りに机の上に並べるように言つた。

U E

この言葉の中にあるもう一つの新しい音をも間もなく見出させ、そしてその符號 M をも子供に習得させた。このようにして美しい言葉、

M U T T E R

が間もなく完全に机の上に並べられた。子供は非常な喜びで、それを既に學んで覺えてる

V A T E R

と附け加えた。

その後で母と子供とは兩方の言葉の音や符號を何回も比較して、一つの言葉の中にある同じものと違ふものを探し出した。このようにして子供は並べ方と讀み方が同時に正確になつた。

その喜びのところへ父が叔父と一緒に部屋にはいつて來た。

最愛な父と親愛な叔父との喜びを見た時の子供の眼はまるで楽しいクリスマス朝のように、限りない歡喜と喜悅とに輝いた。

符號や音に就いて試験されたが、リナは何時も結局はその問題を解決したから、遂には「この二つの言葉の棒片を全部崩してしまつてまた直ぐ並べて見たいわ」というようになった。それほど彼女の喜びは非常なものであつた。そして實際言つた通りに棒片を全部くづして間もなくまた美しくきちんと皆の前に

V A T E R

M U T T E R

と置きやがてまたその下に

L I N A

と置いた。

そこで父は娘の名前に

L I E B

(T A N N)

という言葉を置き添へた。そして微笑みながら試すように尋ねて言った。「お父さんの書いたものも讀めるかね。」

「初めの符號はもう知つてますわ」とリナは言った。「次のもまたその次のも知つてます。ただ上の弓形が何の意味が解らないだけ」

母は言った。「このように二つを結ぶものはieと長く伸ばす音の符號を示すものです。さあリナの知つてるところを言つてごらん。」子は「Lie」と言った。母は「では唇を閉じてごらん。そうそう、もうそれでリナはその言葉をいうことになりません。子供は「Lieb」と言った。

さあ二つの言葉を讀んでごらん。と父が勵ました。
「Lieb Lina (かわらぬリナ) と子供は讀んだ。そして愛らしく感謝に満ちた顔つきで父に、母にまた叔父に身をよりそいながら、嬉しそうな眼差しで彼等を見上げ、そしてやさしく「愛するお父さん、優しいお母さん、親しい叔父さん！」と言つた。

「そうです、立派な兩親をもつことは子供達にとつて、何といつても大きな幸せです」と叔父が言った。「ではリナちゃん、明日も此等の美しい言葉が並べられるかどうか見せて頂戴ね。」そこで一同は靜かに食卓についた。

翌朝、母と子供とが一緒に仕事をするように決められた時間が來ると、リナの第一の心配は父や叔父の望みを満たすことであり、彼等から望まれた言葉を並べることだつた。

それらの言葉と言葉の部分の正確な觀察とに依つて、リナ

は間もなく全體の符號を發見し、同時に僅かに二つの新しい開いた音と一つの閉じた音とを發見した。即ち「e」の音の符號は「E」であり「O」の音の符號は「O」それから「H」の響きはHの符號をもつてゐる。

此等すべては注意深いリナに依り、また真心のこもつた母の導きに依つて間もなく學んでしまわれた。そして徹底的に繰返し練習することに依つて、望まれた言葉が母と子供との前で机の上に次のように並べられた。

MEIN LIEBER VATER
(マインリェーベアトァー)

MEINE LIEBE MUTTER
(マインリェーベムテア)

MEINE LIEBE ELTERN
(マインリェーベエルテア)

大へんな喜びだつた。併しもつと嬉しかつたことはその後、父が今日は何時よりも早く叔父と一緒に歸つて來て、そこに並べられた文字を讀み、その上にまた並べられたものに次のような言葉、

LINA IST UNSER LIEBES KIND
(リナイストゥンゼアリェーベキント)

を加え、そしてリナが母の助けで讀むことが出來た時だつ

た。というのはこの中で知らない符號はたつたSとKとDとの三つだけであることが發見され、そして優しい母は子供にそれをすぐに明らかにすることが出来たから。

さて父と叔父とは更に聲を立ててそれらの言葉を読んだので、リナは母の手を取り、彼女の小さい仕事臺の置いてある窓の方へ連れて行き、低い聲で何かしきりにささやいた。母は優しく子供を眺め、そして指で仕事臺に二三の符號を描いた。満足そうにリナは父のところに戻り、そして「一寸暫らく窓の方に行つて頂戴。私また何か並べて見たいの。そして皆にそれが讀めるかどうか見て頂戴」と頼んだ。

母の靜かな助けで間もなく机の上に次のような言葉が並べられた。

DU BIST UNSER GUTTER VATER

(D U N A N D A M M E S S E N O N K I N D E R N)

母はリナにたつた一つの新しい符號Gを示したただけだつた。「さあいらつしやいませ、お父さん、リナと私とが無言の言葉で何て言つてるか讀んでごらん」と母は言つた。

父はそれを讀んで母と子供とを抱いて言つた。「お前達は私の喜び、私の幸福。」

そこへ叔父が靜かに近寄つて來て。「おお、皆さんの幸福と喜びと平和との仲間の四人目に私を加へて下さい」と頼んだ。

「ああ叔父さん、あなたのこともほんとに考えてましたわ。でもお母さんがお食事が待つてつておつしやつてますか

ら、今はもうその言葉を作る時間がありませんの」
このようにして幸福な家族、幸せなリナは楽しい日日を送つた。彼女は絶えず自分の棒片の入つた小箱を手にしては、到る處で家族の人々の名前を並べようとした。そして彼等と全體との間柄(從兄弟であるか祖母であるか)を表はそうと試したりした。このようにして間もなく周圍の人々の中で彼女が棒片で並べることの出来ないどんな名前も、またどんな間柄もなくなつた。

○本誌の増頁と發展

本誌は、誌友諸君の御支援の下に、發行部數を加え、益々その使命を感じつゝあるが、本號即ち九月號より、四〇頁に増頁し、一層内容の充實をはかり、幼稚園、保育所の實際家及び研究家諸氏のために、必要な理論と適切なる實地とを以て、新しき幼児保育の進展に貢献し來々年を以て刊行まさに半世紀五十年の久しきに達する、我國最古の保育誌たる誇りにこたえようとする。古く親しき誌友諸氏の御高誼を謝すると共に、そのお力によつて、全保育界漏るゝところなく、新しい誌友を迎え得ることを切望する。

昭和二十四年九月

日本幼稚園協會
『幼兒の教育』編輯部